



IRCN

国際交流情報

International Relationship Committee News

第12号

2016

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2016 年春季号

目 次

I 部：グローバル化時代における学び方を探る

グローバル化が進む中で伝統的なことをどのように教えているか

阿部 守

…美術教師として「伝統を教える」ことを問うた時に、日本文化の歴史を学ばせることを即座に思い浮かべる。…しかし、ここでは、美術のつくることの喜びと豊かさを「伝統」として上げたいと思う。時間を忘れ、制作することの大切さ、その手を通した素材との対話と、完成までに至る葛藤は何にも替えがたい貴重な体験である。…

p.6



学生作品 2015 大島にて制作

グローバル化時代における学び方を探る 濱口由美

3年前から実践交流を続けている上海師範大学附属第一小学校（以下、第一小と記す）では、伝統文化への尊重や継承に重きが置かれた美術教育が展開されている。本稿では、第一小での実践「吹墨絵」（授業者：邵先生）と「造形遊び」（授業者：筆者と学生）の記録をもとに、「伝統的なことをどのように学ぶのか」といった視座からグローバル化時代における学び方を探ってみたい。

p.7



アルミホイルの造形遊び

グローバル化が進むなかで伝統的なことをどのように教えているか

遠藤敏明

…この題目はグローバル化と伝統を対立するものとして扱っているのだろうか？と考え出したら、今度は「伝統的なこと」という表現が気になり始めた。…／教員として駆け出しの頃、効率の良さばかりに目を向け、電動工具をたくさん取り入れてみたことがある。卒業する学生が「卒業すると機械がないから、木工はできない」と言われ、基本的な工具でできることをきちんと学ぶようにすることの大切さに気付かされた。…／…世の中の流れは確かに感じられるが、子どもたちには効率を追うばかりではなく良き人生を歩んでほしい。伝統的な「こと」が、その力となるのではないだろうか。

p.9

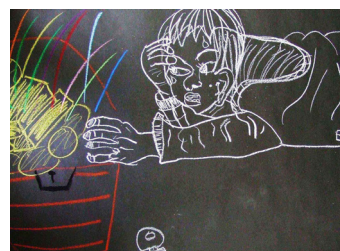


リンシェーピング大学で、ねじをつくる道具を作っている学生。課題はその先だから時間がかかる。

「線」による表現の可能性を振りかえる

長瀬達也

「線」は人間が幼児期から活用する造形要素だが、現在では教員の重要性に対する意識は高くない。…／しかし、…秋田市造形教育研究会は各小学校から出品されたクロッキー作品で「クロッキー巡回展」を実施している。／…筆者は学生と共に秋田市内の小学校4年生で、…「宝さがしたんけんたいになってみよう」を実践している。…黒色のロール画用



やっと「宝」に辿り着いた様子を表現

紙を洞窟に見たて、洞窟の中の宝さがしをしている様子を想像して「線」で表現するものであった。／子供たちは表したいことを考え、2人1組で交互にモデルを務めて、宝さがしをしている姿をクレヨンによる強弱や長短などのある「線」で、想像的、あるいは写實的に…表現を展開していた。…

p.10

Ⅱ部：グローバル化が進んでいる中で伝統的なことをどのように教えているか

グローバル化が進んでいる中で伝統的なことを どのように教えているか

蝦名敦子

地域の伝統文化であるねぷた祭り（重要無形文化財）に関連した、小学校での灯籠製作の実践例を取り上げたい。題材は2011年から2014年にかけて3段階に発展していった。…／児童の意欲に応じる形で教材も展開していったが、そこには祭り文化の環境が子ども達の表現を支えている。当初、祭りに参列することは想定していなかった。子どもの作品の良さが結果的にその道を開き、さらに作った灯籠を担いでもよいとなると、児童の参加人数も一気に増えた。子どもならではのユニークな灯籠が完成し、児童も主体的に祭りに参加する実態が確認される。p.11



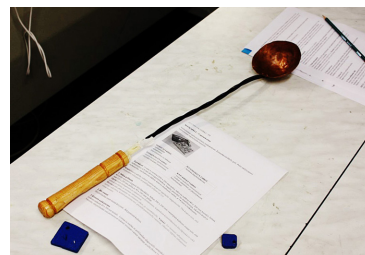
2011 年小4

フィンランドのものづくり教育における伝統

三根和浪

フィンランドのものづくり教育は、クラフト科（フィンランド語では、「手仕事」を意味する käsityö）において実現される。／…このグローバル化時代にあって、伝統との関連で第一に思い出されるのは、図に示したクラフト科テクニカル（＝技術）分野の柄杓づくりである。フィンランド伝統のサウナでは、焼き石に水をかけて水蒸気を発生させる。この時に用いる金工の柄杓づくりを教材にするのだ。取材では、…自宅のサウナで実際に用いることができるため、大変人気の高い教材なのだそう。／図2は小学校3年生のクラフト科テキスタイル（＝織物）分野として観察したマクラメづくりである。…

p.12



サウナ用の柄杓

韓国の伝統的なパッチワーク「チョガッポ」の教育的意味

佐藤昌彦

韓国の梨花女子大学校師範大学附属中学校（ソウル）と北海道教育大学附属札幌中学校との国際交流に関わって、これまで3度韓国を訪問した…。その訪問を通して、韓国の伝統的なパッチワークとしてのチョ



韓国・仁寺洞。店のショーウィンドー
に飾られていた「チョガッポ」

ガッポに対する認識を深めた。／チョガッポは、物を包んだり覆ったりするための布であり、親から子へ、子から孫へと韓国の人々の生活の中で受け継がれてきた造形である。端切れを縫い合わせて一枚の布を新たに作り出す。その背景には小さい布や残った布を捨てずに大切に活用する心が継承されている。

p.14

学校現場で教えられている伝統

森高光広

グローバル化やネット化が進む社会で国際的な視点から日本の様々なよさが再発見されている。／日本人が見落とすものも含め、新たに日本のよさとして海外から評価や再認識されるものは少なくない。中には伝統的なものもある。／では、美術科や図画工作科に於いて、「伝統」をどのように教えているのだろうか。…

p.15



授業事例「型押し染め」

西洋絵画を通した欧州伝統文化理解

岡田匡史

西洋絵画を読む読解的鑑賞の研究を継続中だが、…近年は、欧州で伝統的と公認されるキリスト教基盤の絵画の鑑賞指導を、日本なる非キリスト教文化圏で育つ児童生徒に日本で日本人教諭がどう行えるかを考えてきた。／…／…パリ同時多発テロで銃撃により最愛の伴侶を失ったアントワヌ・レリス氏が、加害者側と同水準で闘う愚かしさを指摘し、「君たちに憎しみという贈り物はあげない(2015.11.22 付『朝日新聞』)」と、赦すことで悲歎を乗り越える静かな決意を主張し、世界中に共鳴と感動の輪が広がっている。…／個人的体験に基づくが、レリス氏の生きる姿勢の真摯さと、サン・マルコ修道院で実見して初めて知り得たフラ・アンジェリコの聖画群が放つ主題性とは深部で通底し合う。…

p.16



フラ・アンジェリコ (Fra Angelico) 「受胎告知」 1440 年代前半 サン・マルコ修道院 (現美術館)

地域の狛犬再発見～つながる思い～ 竹内とも子

勤務校は、校舎改修工事ため仮校舎に移転中である。通学路も変わり、ほとんどの児童が靖国神社に沿った歩道を通る。その通学路からは、三対の鎮座する狛犬を見ることができるのであるが、児童が特に気に留めている様子はない。本題材は、その狛犬を改めて取り上げて鑑賞する活動を通して、身近な造形物のよさや特徴を感じ取り、大切にしようとする…／…／その後、沖縄のシーサー、中国の獅子像、インドの四頭獅子柱頭、トルコのボアズカレやギリシャのミケーネの古代遺跡の獅子門、ロンドンのトラファルガー広場のライオン像を鑑賞した。…

p.17



身近にある狛犬を改めて鑑賞することで、…興味・関心が高まっている様子であった。

編集後記

p.19

安東恭一郎先生追悼 大学美術教育学会 増田金吾理事長

p.20

国際交流情報 IRCN 次号予告と原稿募集

2016
IRCN

発行：増田金吾
[理事長・東京学芸大学]

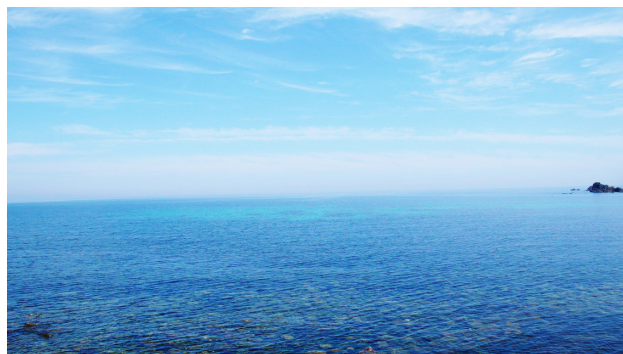
委員長：安東恭一郎
編集：鈴木幹雄

I . グローバル化時代 における学び方を探る

グローバル化が進む中で
伝統的なことをどのように教えているか
阿部 守

日頃、グローバル化や伝統的なことを意識して生きていない。両方とも意識して生活するものではないかも知れない。ひところ、よく「国際化」という言葉を使い、外国の文化に接することの大切さが言われた。最近では「グローバル化」が頻繁に飛び交う。国際化から一步踏み出て、世界はひとつ、という考えが浸透してきたように感じる。IT の進化で世界はひとつになり、一体化に向けてさらに進んでいる。この恩恵を日常で享受し、生活での好奇心は満たされ、広がり且つ便利になった。素晴らしいことである。手紙でやり取りしていたころとは隔世の感がある。ロンドンでひとり暮らしをしていた四半世紀前、日本の家族宛に毎日手紙を書き、寂しさを紛らわせていた頃を懐かしく思う。しかし、本当に「世界は近く」なり色々な異なる価値を共有できるようになっているであろうか。時間を掛けてじっくりとものごとを考え、行い、対話することを失ったのも事実である。

美術教師として「伝統を教える」ことを問うた時に、日本文化の歴史を学ばせることを即座に思い浮かべる。それも結構である。しかし、ここでは、美術のつくることの喜びと豊かさを「伝統」として上げたいと思う。時間を忘れ、制作することの大切さ、その手を通した素材との対話と、完成までに至る葛藤は何にも替えがたい貴重な体験である。人間しか出来ない伝統である。



working site 筑前大島の海



大島での制作一日頃の教室での制作とは違う環境のなか、
発想が広がる



学生作品 2015 大島にて制作

年に数回授業を近くにある宗像市大島で行っている。「神々が宿る島」と云われている処である。海岸に流れ着いた漂着物の中にはハンゲル、中国語などの表記も見つかる。時間を隔てて流れ着く陶片や動物の骨。また、様々な形の流木や石など制作素材にはこと欠かない。毎回題材を変え、学生諸君の感性に沿った制作を行なっている。現場のみで成立させるもの、また持ち帰ることのできるもの。30年近く行ってきた授業である。場に立ち、素材を自分の足、眼と身体をつかって拾い集め、手を駆使して作品へと創作する。この基本的な営みを「伝統」として捉え、教え・学ぶ美術教育のひとつの在り方として考えている。

(福岡教育大学教授)



学生作品 2015 大島にて制作

グローバル化時代における学び方を探る 濱口由美

はじめに

3年前から実践交流を続けている上海師範大学附属第一小学校（以下、第一小と記す）では、伝統文化への尊重や継承に重きが置かれた美術教育が展開されている。本稿では、第一小での実践「吹墨絵」（授業者：邵先生）と「造形遊び」（授業者：筆者と学生）の記録をもとに、「伝統的なことをどのように学ぶのか」といった視座からグローバル化時代における学び方を探ってみたい。

「吹墨絵」の記録から

第一小の1コマの授業時間はわずか35分。教科担任制のため、休憩時間は教室移動のために使われる。このような学習環境下における授業は実にシステムティックである。

5年生の「吹墨絵」の授業もそうであった。導入では、教師が実演しながら活動ゴールとなる参考作品をつくって見せた。子どもたちの活動は、その教



写真1：吹墨絵



写真2：完成した吹墨絵

師の「行為を真似る」ところから始まる。まず、画用紙上の墨汁にストローで息を吹きかけた(写真1)。墨が生き物のように動き出すのを見て、息を吹きかける強さや方向を試す子どもが出てきた。さらに、指を使って季節の葉っぱを表現していく。最後にその木の下に思い思いの絵を描いた。時間内に仕上げることも重要課題なのであろう。どの子も自らの手や身体をずっと動かしていた。35分後、37名全員の「吹墨絵」の完成作品が黒板に展示され授業が終わった(写真2)。

言わずもなが、本授業は伝統文化に親しむために設定されたものである。しかし、次の「造形遊び」の記録と重ねてみると、この授業が別の意味においても伝統を学ぶための鍵をもっていたことに気付かされる。

「造形遊び」の活動記録と重ねて

活動ゴールが示されない「造形遊び」に取り組んだ子どもたち。スタート時こそ戸惑いが見られたものの、終わってみると彼らは「吹墨絵」の授業と同じく「行為を真似る力」を活用しながら、独自の「造形遊び」を展開させていた(写真3・写真4)。例えば、誰かが自分の顔を型にしてアルミホイルの仮面を作って見せる(写真3)。すると、その行為が瞬間に拡散し様々な仮面が誕生する、といった具合である。材料に働きかける造形遊びの醍醐味が「行為を真似る」ことで創造的にバトンタッチされていったのである。

終わりに

二つの授業記録を重ねて見ると、「行為を真似る」プロセスとは、自らの身体を通して異なる時代や文化を感じ取るプロセスのようにも思えてくる。グローバル化時代における伝統的なものに対しての学び方の一つが、ここに見えてくる。

(福井大学教授)



写真3・4：アルミホイルの造形遊び



写真：5 顔を型にした仮面

グローバル化が進むなかで 伝統的なことをどのように教えているか 遠藤敏明

グローバル化とは「これまでの国家や地域の境界を越えて地球が一つとなるプロセス」と聞くと何かありがたい印象もある。一方で、環境破壊、少数のみならず古い文化の破壊や貧富の差の拡大などのマイナスイメージも伴うようだ。この題目はグローバル化と伝統を対立するものとして扱っているのだろうか？と考え出したら、今度は「伝統的なこと」という表現が気になり始めた。私は伝統工芸ではないが、大学で木材工芸を指導している。我々の仕事のなかで、伝統的な「こと」というのはかなり広い範囲を占めている。例えば、毎日使う小刀、カンナやノミも、その存在に始まり、道具や材料の取り扱いについても、伝統的な流儀がある。それぞれには、理由があり、多くの人々によって伝えられてきた。伝統的な「こと」であると思う。

1984年から1986年まで、私はスウェーデン国立リンシェーピング大学で学んだ。オットー・サロモン校長が開学したネースからリンシェーピングに移転しスロイド・インスティテュートとなったところである。スウェーデンには、例えば伝統的な木工技術を中心にした「ものづくり」である木材スロイドがある。これが学校の教科としても教えられていることは、皆さんもご存知のことだと思う。スウェーデンの人々の生活にスロイドは深く入り込んでおり、教育としては成功した一例ではないだろうか。スウェーデンでは、日常の生活でも教育でも手仕事が大切にされている。実際のところ、スウェーデンで学んだ伝統的な「こと」は、日本の伝統的な「こと」と共通する部分も多い。すなわちグローバルでもある。

教員として駆け出しの頃、効率の良さばかりに目を向け、電動工具をたくさん取り入れてみ



図1：オットー・サロモンが設立したスロイド教員養成所



図2：リンシェーピング大学の機械設備。スロイドでは教材はすべて先生が準備する。



図3：リンシェーピング大学で、ねじをつくる道具を作っている学生。課題はその先だから時間がかかる。

たことがある。卒業する学生が「卒業すると機械がないから、木工はできない」と言われ、基本的な工具でできることをきちんと学ぶようにすることの大切さに気付かされた。マンフォードが『芸術と技術』のなかで、「機器がいちじるしく発達したことが、かえって技術上の完全主義という誤った理念を人々に与えた」と記しているが、「機械がないとできない」「自分でやっても無駄」「時代遅れ」などという思い込みとともに「自分でやろうとしない」というエンデの言うところの虚無の世界に陥っていないだろうか。

日本では、アマチュア作品まで機械成形のものばかりになりつつある。家に来る大工さんが、私のカンナを見て、「最近、使わないなあ」とつぶやく。世の中の流れは確かに感じられるが、子どもたちには効率を追うばかりではなく良き人生を歩んでほしい。伝統的な「こと」が、その力となるのではないだろうか。

(秋田大学教授)

「線」による表現の可能性を振りかえる

長瀬達也

「線」は造形要素の1つだが、造形表現で果たす役割は小さくない。

「線」を活用した表現は古来より数多く創造されてきた。現在のマンガやアニメーションでも、「線」は重要な役割を果たしている。図画の発達段階を考えてみても、幼児期のスクリブルやマンダラ、そして頭足人などは「線」によって成り立っている。「線」はグローバル的なものであり、人間の造形表現の基盤でもあろう。

「線」は人間が幼児期から活用する造形要素だが、現在では教員の重要性に対する意識は高くない。戦前の図画教育では「線」への意識が高く、自由画教育提唱者の山本鼎は線描であるクロッキーを盛んに提唱している。クロッキーは戦後も扱われていたが、近年は「美術的」、あるいは「古い」というイメージがあるためか、単独で扱われることが少ない。

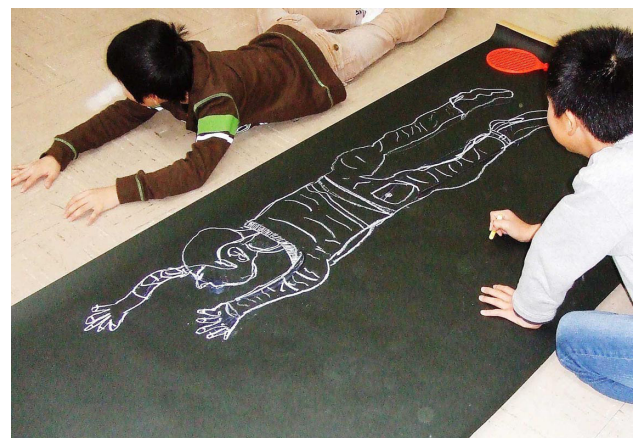
しかし、秋田県では「クロッキー」が現在でも扱われている。秋田県造形教育研究会はクロッ



図4：小学校4年のスロイド授業。生徒の後ろにある材料に注目。



図5：小学校4年のスロイド授業。女の子の使う大きなかんな。



モデルは「宝さがしたんけんたい」になりきって

キーも意識したスケッチブックを編集、発行している。秋田市造形教育研究会は各小学校から出品されたクロッキー作品で「クロッキー巡回展」を実施している。

クロッキーは対象を「線」で素早く短時間で表現するものであろう。しかし、秋田県で、特に小学校で実践されているクロッキーでは時間は短くはない。自分の感性を大事にして対象をよくとらえ、表したいことを見つけて、「線描材」で表現することとしている。

筆者は学生と共に秋田市内の小学校4年生で、子供が「線」による表現で習得的ではなく、探究的に活動することを意図した「宝さがしたんけんたいになってみよう」を実践している。A社の昭和55年度用図画工作科教科書(2年生用)の「トンネルくぐり」を参考にして、黒色のロール画用紙を洞窟に見たて、洞窟の中の宝さがしをしている様子を想像して「線」で表現するものであった。

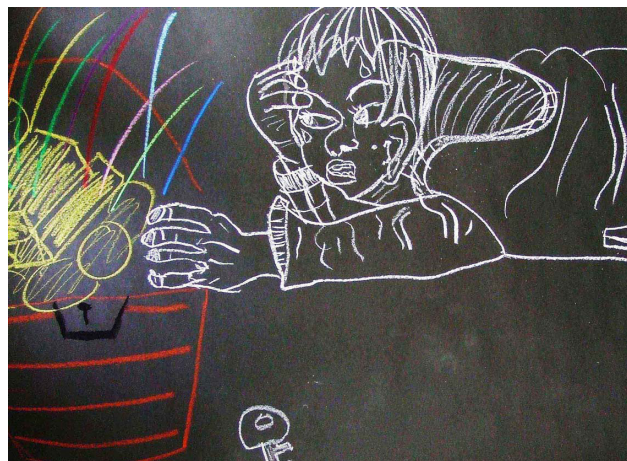
子供たちは表したいことを考え、2人1組で交互にモデルを務めて、宝さがしをしている姿をクレヨンによる強弱や長短などのある「線」で、想像的、あるいは写實的に様々な表現を展開していた。そこには拡散的で、探究的な表現の姿があった。このような、一見「古く」映る題材や表現にも、学習する価値があり、大事だと筆者は考えている。(秋田大学教授)

Ⅱ．伝統的なことを どのように教えているか

グローバル化が進んでいる中で伝統的なことをどのように教えているか

蝦名敦子

地域の伝統文化であるねぷた祭り(重要無形文化財)に関連した、小学校での灯籠製作の実



やっと「宝」に辿り着いた様子を表現



自分だけの「線」で表現



図1: 2011年小4

実践例を取り上げたい。題材は2011年から2014年にかけて3段階に発展していった。以下のことが判明する。①授業の中で作った灯籠を持って実際の祭りに参加する道が開かれた(図1)。②新4年生が骨組みから作りたい、と改良形が一から作られた(図2)。③その学年が6年生になると、もっと大きく複雑なものに挑戦したいと、習得した基本形を応用して発展的な形を作る(図3)。

児童の意欲に応じる形で教材も展開していったが、そこには祭り文化の環境が子ども達の表現を支えている。当初、祭りに参列することは想定していなかった。子どもの作品の良さが結果的にその道を開き、さらに作った灯籠を担いでもよいとなると、児童の参加人数も一気に増えた。子どもならではのユニークな灯籠が完成し、児童も主体的に祭りに参加する実態が確認される。

地域の伝統的なものを教材化に結びつける可能性を感じている。材料・用具、技能の習得を教材化で行うことによって子どもに技能が体得され、定着すると、さらに応用し工夫してより大きく複雑なものを作り上げる。祭りにも堂々と参加していた。それはグローバル化が進んでいる中でも身近な所から、自分達で作り上げたという自信がそれを可能にさせている。自信をもって自分達のものをしっかりと作ることが、またグローバルなものへと繋がっていくのではないだろうか。

(弘前大学教授)

フィンランドの ものづくり教育における伝統 三根和浪

フィンランドのものづくり教育は、クラフト科(フィンランド語では、「手仕事」を意味する *käsityö*) において実現される。



図2：2012年小4



図3：2014年小6

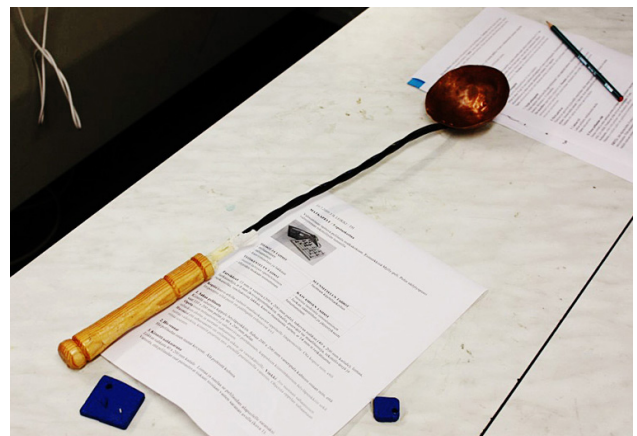


図1：サウナ用の柄杓

このクラフト科の特徴について、これまで、「グループ学習の重視とプロジェクト学習」その他の特徴を抽出した。これらは、P I S A型学力の習得をねらった問題解決的な探究学習を重視したものであり、謂わば、グローバル化対応の学力と言えるものであった。

このグローバル化時代にあって、伝統との関連で第一に思い出されるのは、図1に示したクラフト科テクニカル（＝技術）分野の柄杓づくりである。フィンランド伝統のサウナでは、焼き石に水をかけて水蒸気を発生させる。この時に用いる金工の柄杓づくりを教材にするのだ。取材では、クラフトへの興味を持たせるため、小学校第1学年の最初の段階でつくることがあるという話だった。自宅のサウナで実際に用いることができるため、大変人気の高い教材なのだそうだ。

図2は小学校3年生のクラフト科テキスタイル（＝織物）分野として観察したマクラメづくりである。お好みの色の紐を選び、編んだり組んだり結んだりしながら、やはり生活で実際に用いる装飾をつくるものである。これも人気が高いそうだ。

これらの事例のように、伝統工芸など古くから伝わる手仕事をものづくり教育に導入することによって、伝統との接点を持つ場がある。

ただ、伝統とは伝統工芸のなかにのみあるわけではない。先に記したフィンランドのものづくり教育におけるP I S A型学力やグローバル化対応の学力が、現代的教育課題に対応するという意味で不易流行の「流行」側面であるとするれば、「不易」の側面にも伝統との関連をみることができる。

図3の例では、小学校4年生が鉋（かんな）を使って一生懸命に木を削っている。図4の例では、同じく小学校4年生が、木工部品に一生懸命ニス塗りをしている。このような木工学習にも、「伝統と関連したこと」があるのではないか。

それは、フィンランド国民教育の父ウノ・シグネウス（図5）が、職業教育ではなく普通教



図2：マクラメづくり



図3：木工の鉋削り



図4：木工部品のニス塗り

育にものづくりを世界で初めて導入し、全ての子どもたちにこの学びを保障した意義に通じる。行為に着目すれば、それはペスタロッチーの3H（Head：頭，Heart：胸，Hand：手）にも通じるだろう。しっかりと手を動かして工夫したり，しっかりと頭を働かせて工夫したり，しっかりと感じて工夫したりすること，これら変えてはならない本質，つまり不易が保障される場に，ものづくり教育の伝統が息づいているのだ。（広島大学准教授）

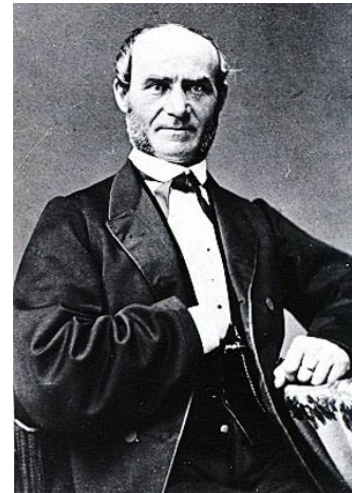


図5：ウノ・シグネウス

韓国の伝統的なパッチワーク 「チョガッポ」の教育的意味

佐藤昌彦

韓国の梨花女子大学校師範大学附属中学校（ソウル）と北海道教育大学附属札幌中学校との国際交流に関わって，これまで3度韓国を訪問した（2012・2013・2015年）。その訪問を通して，韓国の伝統的なパッチワークとしてのチョガッポに対する認識を深めた。

チョガッポは，物を包んだり覆ったりするための布であり，親から子へ，子から孫へと韓国の人々の生活の中で受け継がれてきた造形である。端切れを縫い合わせて一枚の布を新たにつくり出す。その背景には小さい布や残った布を捨てずに大切に活用する心が継承されている。また，布の生命をつなぐ行為は人間の長寿につながるという意味ももつ（金賢姫『ポジャギ POJAGI』文化出版局，1999年）。ソウルの仁寺洞（インサドン）にある伝統的な造形品を扱う店のショーウィンドウには様々な「チョガッポ」が展示されていた。2013（平成25）年発行の韓国の教科書（小学校5～6年）には表紙とともに本文にも教材として掲載されている。明洞（ミョンドン）の近くの草田繊維（チョジョンソミュ）・キルト博物館（ソウル）には，多様な「チョガッポ」が数多く展示されていた。

では，こうした韓国の伝統的なパッチワーク



韓国・仁寺洞（インサドン、ソウル）で。店のショーウィンドーに飾られていた「チョガッポ」



「チョガッポ」に関する文献とポストカード

「チョガッポ」にはどのような教育的意味があるのか。そう問われれば、「ものづくりの責任を学ぶ教材になり得る」と答えたい。「ものづくりの責任を学ぶ」という視点は、2011（平成23）年3月の東京電力福島第一原子力発電所事故を踏まえたものである。福島原発事故では、大量の放射性物質によって自然環境が汚染され、多くの人々が生きる場を失った。ものづくりには「責任」が伴う。前述したように、布の生命をつなぐ行為は、人間の長寿を願う行為でもあり、人間の生命も含めて、自然の生命の尊重に結びつく。原発事故の直接的な原因は地震・津波であるが、本質的な原因は「生命を守るという責任感の欠如」と発表された（東京電力福島原子力発電所事故調査委員会『国会事故調 報告書』徳間書店、2012年）。

韓国の伝統的なパッチワークであるチョガッポは、人間としての「責任」を学ぶことができる貴重なものづくりのひとつであろう。

（北海道教育大学教授）



草田織維（チョジョンソミュ）・キルト博物館（ソウル）での資料



韓国の教科書に掲載された「チョガッポ」（本文）

学校現場で教えられている伝統

森高光広

グローバル化やネット化が進む社会で国際的な視点から日本の様々なよさが再発見されている。

日本人が見落とすものも含め、新たに日本のよさとして海外から評価や再認識されるものは少なくない。中には伝統的なものもある。

では、美術科や図画工作科に於いて、「伝統」をどのように教えているのだろうか。中学校の美術では、題材の中に伝統的なものも確かに含まれている。例えば、先日中学校美術の授業参観をした際に「15歳の自分」という題材で、和紙や墨を活用していた。2年の授業でも「型押し染め」を用いた手ぬぐい制作があった。中学生は伝統的なものもモダンデザインテクニックも区別することなく、自分の表現の一つとして活用していた。



図版1：授業事例「型押し染め」1



図版 2: 授業事例「型押し染め」2



右：図版 3：大学生陶芸作品例

伝統には頑なに守り抜くイメージもあり、一方グローバル化には柔軟に受け入れるイメージもある。小学校の図画工作科でも墨や和紙の活用はあるが、よく考えると画材や用具はとうの昔から日本固有のもの以外にも活用されている。例えば、絵画領域で使用する画材では、筆・色鉛筆・絵の具・パステル・コンテ・マーカー等、日本固有の伝統的な画材ではないものが当たり前のように活用されている。実は画材や用具そのものではなく、自己の表現に柔軟に活用することこそ、日本では伝統的に行われてきたのではないかともいえる。

制作の中で改めて伝統的な表現や伝統について子どもに意識させる、その指導観や手立てを持つ学生の育成も今後心がけていきたい。
(植草学園大学教授)

西洋絵画を通した 欧州伝統文化理解

岡田匡史

西洋絵画を読む読解的鑑賞の研究を継続中だが、選んだ鑑賞対象の大半が、テキスト準拠型解釈や図像学適用が可能なキリスト教絵画だった。そして、少々入り組むが、近年は、欧州で伝統的と公認されるキリスト教基盤の絵画の鑑賞指導を、日本なる非キリスト教文化圏で育つ児童生徒に日本で日本人教諭がどう行えるかを考えてきた。

絵画を主媒介とする欧州伝統文化の理解に関心を抱くのは、グローバル化が進行し、ネット環境内で文字や視聴覚情報での欧州理解が飛躍的に拡大しても、欧州は未だ遠き異文化圏であり、理解及ばぬ深層が横たわると感じるからである。深層とはキリスト教である。ここを把握できぬと欧州の本質的理解



サン・マルコ修道院（現美術館）中庭（筆者撮影）

には到れぬと懸念する。

キリスト教的精神性の一つに赦しがあり、欧州伝統文化の一角と解せるが、この種の概念は理屈で解る徳目と違い、ゴルゴタの丘で磔刑に処されたイエスが身を以て体現した贖罪と組み合わせられないと解らない。パリ同時多発テロで銃撃により最愛の伴侶を失ったアントワヌ・レリス氏が、加害者側と同水準で闘う愚かしさを指摘し、「君たちに憎しみという贈り物はあげない(2015.11.22 付『朝日新聞』)」と、赦すことで悲歎を乗り越える静かな決意を主張し、世界中に共鳴と感動の輪が広がっている。その底辺に息衝く思想とは、ヨハネ福音書 13 章 34 節が記録するイエスの言葉、「あなたがたは互いに愛し合いなさい。」に立脚すると想像する。

個人的体験に基づくが、レリス氏の生きる姿勢の真摯さと、サン・マルコ修道院で実見して初めて知り得たフラ・アンジェリコの聖画群が放つ主題性とは深部で通底し合う。画集的知識だけだと、かかる認識を持つのは困難と思う。欧州理解の上で、臨地体験に勝る術は無い。欧州で聖書情報の凝縮度が桁外れに高い祭壇画類に接する時、現地鑑賞ベースの欧州理解の重要性を思い知らされる。その模擬版の試行が、現段階の読解的鑑賞研究の目標となりつつある。

厳しき試練に遭う時にも生きる力を湧出させる根源的機能を、欧州諸教会の宗教画群は備える。当側面は公教育では触れ難いが、真の欧州理解に近づくべく限界を突き崩す方途を思慮しつつ、読解的鑑賞メソッドの成熟を目指し努力し続けたい。

(信州大学教授)



フラ・アンジェリコ (Fra Angelico) 「受胎告知」 1440 年代前半 フレスコ (階段を上り切ると対面できる 2 階廊下壁画) 230 × 321cm フィレンツェ、サン・マルコ修道院 (現美術館)

画像出典: https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/1/1b/ANGELICO%2C_Fra_Annunciation%2C_1437-46_%282236990916%29.jpg

「地域の狛犬再発見～つながる思い～」

竹内とも子

勤務校は、校舎改修工事のため仮校舎に移転中である。通学路も変わり、ほとんどの児童が靖国神社に沿った歩道を通る。その通学路からは、三対の鎮座する狛犬を見ることができるのであるが、児童が特に気に留めている様子はない。

右：写真 1：通学路に鎮座する狛犬



い。本題材は、その狛犬を改めて取り上げて鑑賞する活動を通して、身近な造形物のよさや特徴を感じ取り、大切にしようとするとともに、我が国や諸外国の伝統・文化理解を進める内容である。授業は第6学年で実施した。

一次では、靖国神社の全四対の狛犬（一対は中国獅子）を、いろいろな角度からプロジェクターで映し出し、鑑賞した。左右の像や他の場所の狛犬との造形的な共通点や違い、特徴を見つけ、立体表現としてのよさや美しさなど、感じ取ったことを発表し合った。児童は映像が映し出されると「あ、あるある！南門のどこ！」「え？後ろから見ると全然感じが違う」などと、すぐに興味を示した。「向かって右は口を開いていて、左は閉じている」「これだけ（中国獅子）、両方口が開いている」「左の像には角みたいなものが付いている」「脚に羽みたいなものが付いている」「赤ちゃんみたいなのが前と背中にいてかわいい。お母さんなのかもしれない」「狛犬といってもみんな体も顔も感じが違う」など、見つけたこと、感じたことを全体の場で発表した。

その後、沖縄のシーサー、中国の獅子像、インドの四頭獅子柱頭、トルコのボアズカレやギリシャのミケーネの古代遺跡の獅子門、ロンドンのトラファルガー広場のライオン像を鑑賞した。そして再び日本に戻り、身近な日本橋の獅子像や、古代オリエントの遺跡を思わせる築地本願寺の狛犬、最後には移転前校舎に隣接する東郷元帥記念公園のライオン像を全員で見ていった。同じ画像を一人一台のタブレットPCにも配布しており、児童は自分のペースで鑑賞しながら気付いたこと・感じたことをワークシートにかいたり、友だちと画像を基に話し、交流したりした。

鑑賞活動を通して、他の場所の狛犬、百貨店のライオン像、外国の国旗に描かれた獅子、獅子舞の頭に似ていることなど、自分の経験と結びつけた新たな気付きもあった。

また、神社や寺の入り口、城の門や柱、街の広場など、人々の大切な場所にあることに気付



写真2：身近にある狛犬を改めて鑑賞することで、新たな発見をし、興味・関心が高まっている様子であった。



写真3：一人一台のタブレットPCで画像同士を比較したり、拡大して細部をみたりして、さらに鑑賞を深める。

いていた。そのことから、国や時代が遠く離れていても、たとえ民族や宗教は違っていても、「守りたい」「強くありたい」など、狛犬や獅子像に託した人々の思いには共通したものがあることに気付くこととなった。

さらに、二次では、自分を「守ってくれる」「力を与えてくれる」狛犬的な像を想像し、粘土でつくる表現活動を行った。児童は、つくりながら、「狛犬画像検索したら、すごくいろんなのがあったよ」「〇〇に旅行行った時に見た」「シンガポールのマー・ライオンも仲間？」「龍とかドラゴン

とかも狛犬みたいなものかな？」などと話しかけた。

通学路の狛犬の鑑賞を通して、児童は他の地域の狛犬にも関心をもったり、国や時代を超えた狛犬・獅子像のつながりを感じ取ったりするなど、新たな視点で見ることができるようになったと考えられる。

(千代田区立九段小学校)

右:写真4:次の授業では、自分にとっての狛犬的な像を想像しつくった。表現活動を通して、狛犬や獅子像に込められてきた思いや願いも想像する。



編集後記

国際交流情報 IRCN 第 12 号が、ここに発行できることとなりました。ご投稿戴きました先生方に感謝申し上げますと同時に、大学美術教育学会の先生方にここにご配信申し上げます。

IRCN12 号は、「グローバル化が進む中で伝統的なことをどのように教えているか」をテーマとして特集しました。第 12 号は、計 10 名の先生方にご投稿いただきました。お寄せ戴きました原稿は相互に響き合い、共鳴し合うことを期し、第 I 部、第 II 部の二部から構成しました。第 I 部は「グローバル化時代における学び方を探る」とし、第 II 部は「グローバル化が進んでいる中で伝統的なことをどのように教えているか」という表題でまとめました。

*

第 I 部には、阿部守先生の「グローバル化が進む中で伝統的なことをどのように教えているか」、濱口由美先生の「グローバル化時代における学び方を探る」、遠藤敏明先生の「グローバル化が進むなかで伝統的なことをどのように教えているか」、長瀬達也先生の「線」による表現の可能性を振りかえる」を収録しました。

また第 II 部には、蝦名敦子先生の「グローバル化が進んでいる中で伝統的なことをどのように教えて

いるか」、三根和浪先生の「フィンランドのものづくり教育における伝統」、佐藤昌彦先生の「韓国の伝統的なパッチワーク「チョガッポ」の教育的意味」、森高光広先生の「学校現場で教えられている伝統」、岡田匡史先生の「西洋絵画を通した欧州伝統文化理解」、竹内とも子先生の「地域の狛犬再発見～つながる思い～」を収録しました。

これら原稿は、国際交流委員会委員の様々な視点からの推薦によるものですが、色々な立ち位置と魅力的な視点からの＜グローバル化現代美術教育論＞を響き合わせ、浮かび上がらせ事によって、わが国美術教育学会の広がりや豊かさが「虹の架け橋」のように広がることを目指しました。

(国際交流委員会委員長 安東恭一郎)

*

すでに『国際交流情報 IRCN』第 11 号に安東恭一郎国際交流委員会委員長が記されておりますように、大学美術教育学会のアウトソーシングに伴う財務事情から、本紙 IRCN は、冊子体から、Web ページ経由の PDF 配信となっています。

本紙は、一方でウェブ紙面の魅力化に取り組み、冊子媒体に匹敵しうる、魅力的な紙面構成を模索してきました。他方で本紙は、グローバル化時代における美術・図工・表現教育の現状と可能性の広報誌面としてより一層魅力的となるような紙面構成を模索してきました。この作業は、既に本紙 IRCN 第

11号において安東恭一郎委員長によって着手され、模索されましたが、本号におきましても、パソコン上での「見え方」も含め、この仕事は継続的に追求されました。例えば、組版上の紙面をA4サイズを基本としながらも、縦寸法を30mm短くし、セルリアン・ブルーの細い枠線を配した点等がその一例です。

＊

本紙は、グローバル化時代における美術・図工・表現教育の現状と可能性を、国際社会から国内教育実践を凝視・反省し、国内の蓄積から国際社会を凝視・反省するという、複眼的・相補的に鳥瞰する回路を設定できれば、と期待しています。しかもとなく精神的にも人員的にも「孤立しがちな」わが国美術教育界の教師の方々の、美術・図工・表現を開花させたいという抱負に栄養素を供給できれば、と考えています。

こういった模索が、大局的には大学美術教育学会の、ひいてはわが国の美術教育界の芸術系教師達のエデュケーション開花の「一助」になればと期待しています。

(『国際交流情報 IRCN』第12号
編集者 鈴木幹雄)

安東恭一郎先生追悼

国際交流委員会委員長 安東恭一郎先生が、病氣療養中のところ平成28年2月16日ご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

大学美術教育学会理事長・
日本教育大学協会全国美術部門代表
増田金吾

国際交流情報 IRCN 次号予告と原稿募集

最後に事務連絡です。次回、並びに次々回の『国

際交流情報 IRCN』は、以下のテーマをトピックとした特集を予定しています。

第13号：トピック「国際社会で取り組まれている美術・図工科教育」

第14号：トピック「いまわが国で取り組まれている国際的な美術・図工科教育」

＊

また、試験的な試みでしたが、第12号では、原稿に際して、次の3種類のいずれかとしました(原稿提出時の選択肢移動は、可能な限り自由としました)。

- カテゴリーA：12号トピック原稿ロング(20字x45行前後、写真：5点以内)

- カテゴリーB：12号トピック原稿ショート(20字x30行前後、写真：3点以内)

- カテゴリーC：12号トピック関連原稿ショート(20字x30行前後、写真：3点以内)

当面、投稿しやすさをご用意する為この募集形式を維持しながら、特集テーマに応じた投稿募集形式の改善を図っていきたいと思います。

＊

第12号の場合、投稿原稿の集まり悪さを考え、投稿者の募集に際しては、国際交流委員会の委員からの推薦や、大学美術教育学会誌の過去業績からの推薦を受けましたが、学会の先生方、地方の先生方からの投稿も期待しています。

なお、お寄せ戴きました投稿原稿は、委員会に報告され、原則的に掲載の方向性を模索したいと思います。ただ同時に、大学美術教育学会の一委員会でもありますので、委員会の前委員長・副委員長、時期前委員長・副委員長、学会理事長の助言・提言を頂きながら、進めて参ることになります。この点はご理解下さい。

次回第13号への投稿希望者の先生方は、次のアドレスへご投稿下さい。

(送付先アドレス：

<inter.r.c.n.suzuki2015@gmail.com>)

(『国際交流情報 IRCN』第12号編集者)



IRC第12号

2016年3月15日発行

発行：大学美術教育学会 国際交流委員会

東京学芸大学 理事長 増田金吾

委員長：安東恭一郎 編集：鈴木幹雄

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2016
IRCN
Vol, 12
2016 年春季号

